名簿No. 1

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

平仄式	平起式
作詩日	平成二九年六月三十日
名前	牛山　知彦

詩題	起句	承句	転句	結句
米壽石川芳雲老師詩書展述懐（庚韻）	石●	川○	芳○	雲○
	頭○	上●	草●	根○
	龍○	麒○	悠○	遥○
	虎●	麟○	然○	拝●
	客●	詩○	香○	一●
	心○	思●	脈●	天○
	驚◎	清◎	脈●	晴◎

読み下し文

米寿石川芳雲老師詩書展述懐

石頭の竜虎に　客心驚き
川上の麒麟は　詩思清し
芳草　悠然として　香脈々
雲根を遥拝すれば　一天晴る

作詩メモ・典故・語註

石頭・・・・石の上
竜虎・・・・すぐれた文章。名文。筆勢の雄健なこと
川上・・・・川のほとり
麒麟・・・・聖人、英才
雲根・・・・雲の生ずるもと

その他のメモ

石川芳雲先生の米寿記念詩書展を拝見した。
全てが自詠漢詩の書作品で、その力強さに圧倒された。
漢詩を作ること、字を書くことを当たり前のことと
している芳雲先生は、会社員生活のあとに書家になった
経歴等からも、遥か遠いが目標とする方である。
大変失礼ながら、お名前の文字を各句の一文字目に
並べさせて頂いた。

名簿No. 2

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
仄起式 竹田城址（灰韻）	衰○	桜○	難○	四●
	叟●	花○	攻●	百●
	登○	満●	孤○	歳●
	高○	目●	塞●	時○
	但●	古●	天○	懐○
	馬●	城○	空○	旧●
	臺◎	来◎	在●	催◎

読み下し文

竹田城址

衰叟　登高　但馬の臺

桜花満目の古城に来る

難攻の孤塞　天空に在り

四百の歳時に　懐旧を催す

作詩日　平成二十九年四月

名前　宇野次郎

語註・典故・作詩メモ

四月十三日　竹田城址に行った。途中までバスで行き約二十分　歩いて登った。天守、城門などなく、石垣だけが残っていた。丁度　城全体　桜が　満開で、城が隆盛だった一六〇〇年頃を　懐古した。

登高ー高い所に登る

その他のメモ

名簿 No. 3

神漢連　九詩期会　詩箋

【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
秋愁	自	鰥	隣	月
	歎	居	家	彩
	多	生	高	赫
	情	事	笑	花
	使	痩	倚	揺
（尤韻）	老	身	窓	落
	愁	修	望	秋

作詩日　平成二九年七月十日

名前　梅村　郁郎

読み下し文

しゅうしゅう
秋愁

なげ
自ら歎く多情　老いて愁う

かんきょ　せいじ　そうしん　おさ
鰥居の生事　痩身修める

隣家高笑窓に倚りて望めば

あざや　かくか
月に彩かなる赫花揺れて秋に落つ

語註・典故・作詩メモ

鰥居……年をとって妻を失くし独り暮しのこと。
生事……食事の準備など生活雑事
赫花……まっかな花。ここでは薔薇

その他のメモ

名簿No. 4

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平仄式	作詩日
仄起式	二九・七・十

名前：岡嶋 宣昭

詩題	起句	承句	転句	結句
客裏逢秋（蕭韻）	長●	客●	一●	牀○
	夜●	居○	蟲○	上●
	秋○	孤○	愁○	燈○
	風○	枕●	聽●	痕○
	木●	轉●	歸○	影●
	葉●	蕭○	心○	動●
	飄◎	寥◎	夕●	搖◎

搖

客裏秋に逢う

長夜 秋風 木葉飄えり

客居 孤枕 転た蕭寥

一虫 愁えて聴く 帰心の夕べ

牀上の灯痕 影動搖

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

名簿No. 8

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
娯金澤	亢 ●	古 ●	歩 ●	黄 ○
	陽 ○	跡 ●	倦 ●	昏 ○
	北 ●	想 ●	浴 ●	陋 ●
	国 ●	馳 ○	湯 ○	巷 ●
	訪 ●	彷 ○	而 ○	慣 ●
虞韻）	名 ○	路 ●	午 ●	肴 ○
	都 ◎	衢 ◎	睡 ●	瓠 ◎

語註・典故・作詩メモ
亢陽：旧暦五月 衢：ちまた、別れ道 陋巷：路地裏 肴：肉や魚を使った料理 瓠：ひさご

読み下し文
金澤を娯しむ
亢陽北国の名都を訪れる
古跡に想い馳せ路衢を彷徨う
歩きに倦み湯を浴びのち午睡する
黄昏陋巷で肴瓠を愉しむ

その他のメモ
六月金澤を訪れ、兼六園や、武家屋敷街、茶屋街、美術館、近江町市場等々を娯しみ、夕暮れ時からは地場の酒肴を慣しんだ

作詩日	平起式
H29.7.8	

名前 武田 一郎

名簿No. 9

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
熱海温泉旅行	豆 ●	珍 ○	客 ●	共 ○
	州 ○	木 ●	土 ●	斟 ○
	湯 ○	千 ○	横 ○	誇 ○
	井 ●	枝 ○	行 ○	酒 ●
	伴 ●	紫 ●	逞 ●	有 ●
（文韻）	夫 ○	苑 ●	情 ○	歡 ○
	君 ◎	殷 ◎	欲 ●	欣 ◎

語註・典故・作詩メモ

豆州…伊豆の国。ここでは、熱海を指す
湯井…温泉
珍木・紫苑…紫の花が咲くジャカランダのことを表現
客土…旅の土地
横行…ほしいままに歩く

読み下し文

熱海温泉旅行

豆州の湯井　夫君を伴ふ
珍木千枝　紫苑は殷なり
客土横行して　情欲を逞しゅうす
共斟すれば酒を誇り　歡欣すること有り

その他のメモ

平仄式	平起式
作詩日	平成二十九年六月二十八日
名前	南上清一郎

名簿No. 10

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
題九成宮醴泉銘（東韻）	陽○	長○	闕●	万●
	径●	廊○	庭○	物●
	閑○	高○	泉○	潤●
	遥○	閣●	水●	生○
	度●	白●	香○	聖●
	涼●	雲○	甘○	徳●
	風◎	中◎	醴●	窮◎

作詩日　平成二十九年七月十三日

名前　原田睦夫

読み下し文

九成宮禮泉銘に題す

陽径の閑遥　涼風度る

長廊高閣　白雲の中

蕨庭の泉水　香りは甘禮

万物を潤生すること聖徳の窮みなり

語註・典故・作詩メモ

「九成宮禮泉銘」は唐の魏徴の撰文、欧陽詢の書。
九成宮はもと仁壽宮といい、隋の文帝の時建てられた。
唐の太宗李世民がここに避暑した時、一筋の泉水が湧き出し、
貞観六年（六三三）このこの碑を建てた。
碑は唐の長安（西安）西北百五十キロの陝西省の深山中にある。
多くの詩人に歌われるうちに、九成宮は次第に朽ちてゆき、
北宋の末には廃墟と化した。
碑石はかの地の天台寺の西北の斜面で碑室保護されている。

その他のメモ

名簿No. 12

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
里山雑詠	下 ●	瑟 ●	草 ●	眼 ●
	丘 ○	瑟 ●	緑 ●	前 ○
	独 ●	秧 ○	稲 ●	洗 ●
	歩 ●	風 ○	田 ○	暑 ●
	小 ●	人 ○	涼 ○	仰 ●
（東韻）	池 ○	影 ●	味 ●	蒼 ○
	中 ◎	空 ◎	足 ●	穹 ◎

平仄式	作詩日
平起式	七月一二日

名前　古川　彌

読み下し文

詩題の読み

丘を下り独り歩む小池の中

瑟瑟たる秧風に人影空し

草緑の稲田に涼味足るも

眼前の暑を洗って蒼穹を仰ぐ

語註・典故・作詩メモ

秧風：早苗を吹く風

丘を下って独り小池のあたりにやってきた。
早苗を吹き通る風の音ばかりで、人影はない。
青々とした稲田に涼しさは感じられるものの
暑さを降りはらって、見上げると青空が広がっていた。

その他のメモ

名簿No. 14

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
偶感	同○	追○	自●	霜○
	甘○	憶●	覺●	髭○
	共○	佳○	白●	老●
	苦●	辰○	駒○	輩●
	幾●	凝●	之○	奈●
（陽韻）	星○	麗●	過●	頽○
	霜◎	粧◎	隙●	唐◎

語註・典故・作詩メモ
時の流れの速さから自分の人生をふと思って 同甘共苦＝苦楽を共にすること 佳辰＝良き日 白駒過隙＝年の過ぎることの速いさま 奈頽唐＝衰えをどうすればいいのか

読み下し文
偶感（くうかん）
同甘共苦（どうかんきょうく） 幾星霜（いくせいそう）
追憶（ついおく）す佳辰（かしん） 麗粧（れいしょう）を凝（こ）らすを
自（みずか）ら覚（おぼ）ゆ 白駒之隙（はっくのげき）を過（す）ぐ
霜髭（そうし）の老輩（ろうはい） 頽唐（たいとう）を奈（いかん）せん

その他のメモ

作詩日 平成二九年五月

平起式

名前 松本祐輔

名簿No. 15

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平仄式	平起式
作詩日	平成二九年六月二一日
名前	三浦 昭二

詩題	起句	承句	転句	結句
偶作	狂○	巨●	路●	行○
	風○	木●	上○	人●
	巻●	鳴○	水○	乱●
	地●	号○	流○	歩●
	雨●	散●	成○	怨●
（先韻）	身○	葉●	迅●	荒○
	穿◎	筵◎	疾●	天◎

読み下し文

偶作

狂風地に巻いて雨身を穿つ
巨木鳴号して散葉を筵く
路上の水流迅疾を成し
行人歩を乱して荒天を怨む

メモ 作詩・故典・註語

迅疾…極めて速い
この日は丁度、出勤時間帯に雨と風が激しく傘も差せないくらいに風が強く、横殴りの雨が降り、関内駅で降りて横浜公園を通り抜けての通勤経路には、無残にも若葉が一面に散っており、水路には音を立てて雨水が流れ込んでいた。

その他のメモ

名簿No. 16

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
三春（真韻）	雨 ●	濃 ○	鶯 ○	緩 ●
	過 ●	春 ○	声 ○	歩 ●
	天 ○	煙 ○	朗 ●	村 ○
	晴 ○	景 ●	朗 ●	郊 ○
	風 ○	興 ●	竹 ●	閑 ○
	色 ●	津 ○	林 ○	暇 ●
	新 ◎	津 ◎	中 ●	人 ◎

語註・典故・作詩メモ

作詩日 四月十五日

反起式

三春（さんしゅん）

雨過（あめす）ぎ天晴（てんは）れ風色（ふうしょく）新（あら）たなり

濃春（のうしゅん）の煙景（えんけい）興津（きょうしん）津（しん）

鶯声（おうせい）朗朗（ろうろう）竹林（ちくりん）の中（うち）

緩歩（かんぽ）す村郊（そんこう）閑暇（かんか）の人（ひと）

名前 三並 哲治

名簿No. 17

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
はぐれ鶯	朝○	既●	先○	疾●
	陽○	夏●	戻●	帰○
	方○	盛○	鳥●	谷●
	彼●	迎○	親○	遊●
	幼●	正●	捜○	暑●
（庚韻）	鶯○	一●	必●	威○
	鳴◎	驚◎	死●	軽◎

語註・典故・作詩メモ

朝陽・・・山の東側の斜面

その他のメモ

作詩日　平成二十九年七月九日

名前　森谷正彦

読み下し文

はぐれ鶯

彼方の朝陽で　幼鶯鳴く
既に盛夏を迎え正に一驚す
先に戻りし親鳥は必死に捜す
疾く帰り谷に遊べば　暑威軽し

名簿No. 18

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
訪故舊信君	上●	幼●	只○	共●
	総●	年○	今○	喜●
	市●	離○	復●	健○
	原○	別●	会●	康○
	閑○	惜●	明○	心○
（上平摩六 魚）	静●	居○	窻○	晏●
	區◎	諸◎	下●	如◎

語註・典故・作詩メモ

居諸を惜しむーーーーーすぎしあり日を惜しむ
區ーーーーところ
晏如ーーーーー安らかで落ち着くさま
五十年も前に企業が移転し移住していった故舊を訪ね互いの健康を確かめ喜び会えた一時を得ることができた。

読み下し文

故舊信君を訪ふ

上総市原、閑静の区

幼年離別、居諸を惜しむ

只今、明窻の下、復会ふ

共に健康を喜び心晏如たり

その他のメモ

作詩日 平成二十九年七月

反起式

名前 諸星暢義

名簿No. 19

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平仄式	平起式
作詩日	平成29年7月12日
名前	山口 幸雄

詩題	起句	承句	転句	結句
看螢	里○	光○	焦●	可○
	田○	点●	恋●	憐○
	無○	群○	蟬○	薄●
	月●	飛○	鳴○	命●
	賑●	映●	螢○	一●
（庚韻）	蛙○	水●	灼●	旬○
	聲◎	明◎	自●	生◎

読み下し文

螢を看る

里田月無く　蛙声賑やかに
光点群れ飛び　水に映じて明らかなり
恋に焦がれて蝉は鳴き　螢は自らを灼く
憐れむ可し　薄命一旬の生

語註・典故・作詩メモ

○里田　里の田んぼ

この夏は近くの里山で螢の発生数調査を手伝った。子供のころ以来のたくさんの螢が飛んでいた。「恋に焦がれて鳴く蝉よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」という都々逸を転句にして、成虫になってから十日ほどの短い命だということを結句にした。

その他のメモ

・月が無くても都会の里山はけっこう明るいのにも驚いた。真っ暗闇にはならない。

二案承句　熠耀群螢映水明
　　転句　俗謂不鳴茲灼自　俗に謂う鳴かずして茲れ
　　結句　可憐地上一旬生　自らを灼くと

○熠耀（ゆうよう）光が鮮やかで明るいさま（螢説あり）